

キャンパスへのアクセス

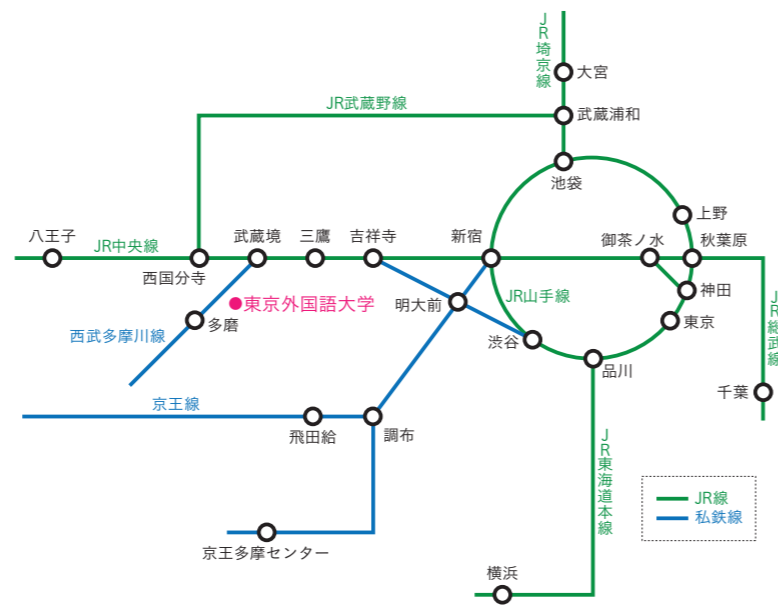
府中キャンパス



電車：JR中央線武蔵境駅
→ 西武多摩川線多磨駅
→ キャンパス 5分

バス：京王線飛田給駅 → キャンパス 7分
京王バス「多磨駅行き」のバスで「東京外国語大学前」下車

徒歩：京王線飛田給駅 → キャンパス 20分



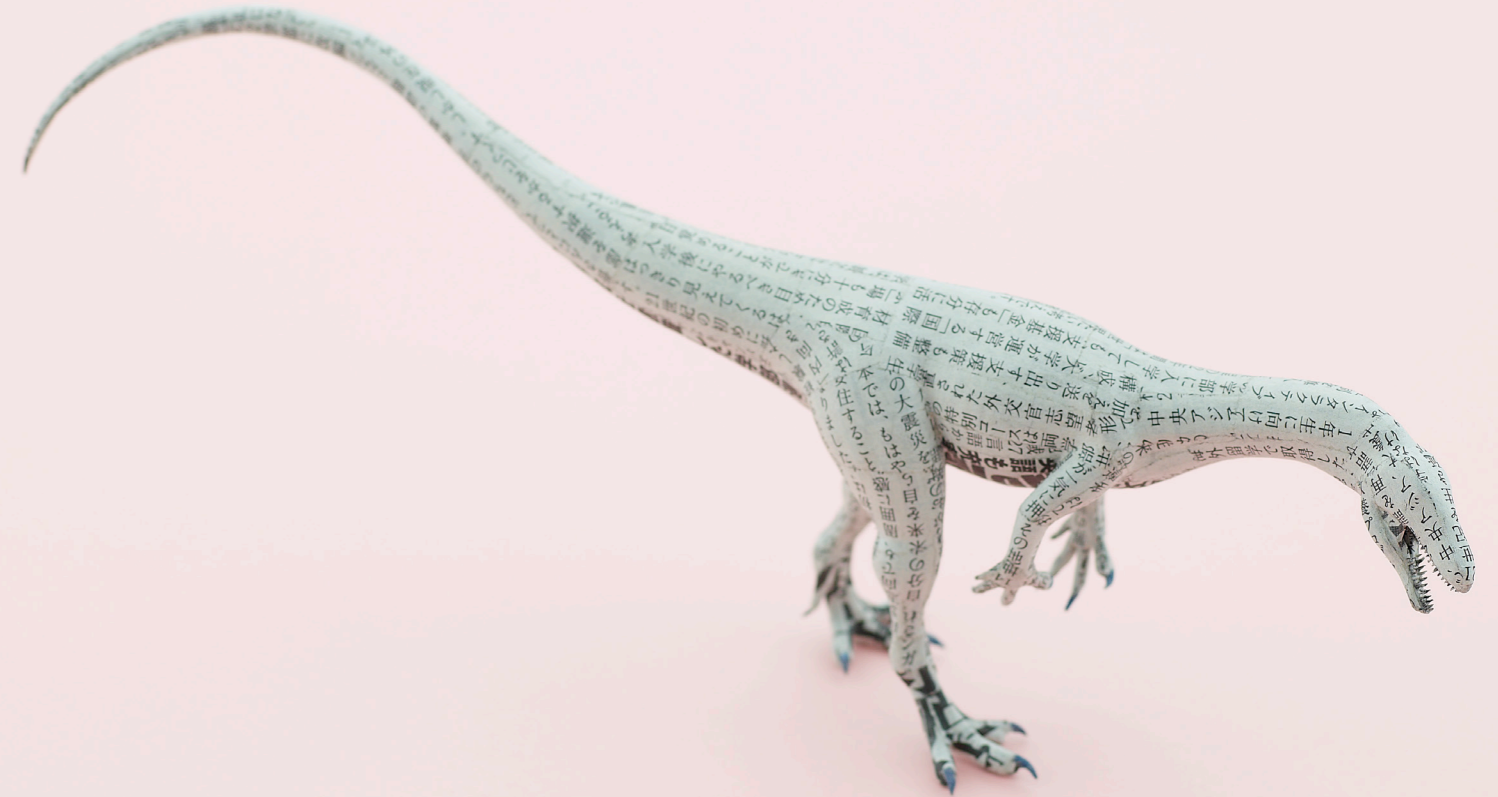
多磨駅までのアクセス ※目安時間

- 東京駅から 46分 中央線快速利用
- 上野駅から 52分 京浜東北線・中央線快速利用
- 横浜駅から 67分 東海道本線利用
- 千葉駅から 98分 総武線快速・中央線快速利用
- 大宮駅から 69分 埼京線・武蔵野線利用

東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies

大学院総合国際学研究科 博士前期・後期課程案内 2017



お問い合わせ先

〒183-8534
東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学 入試課
Tel: 042-330-5179

2016年7月5日発行

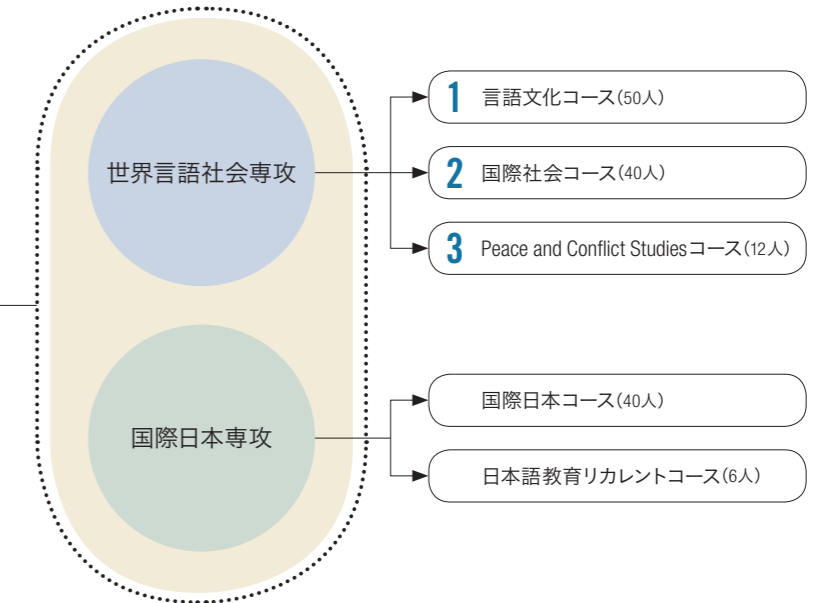
TUFS Towards Interculturality through Language and Area Studies

Contents

総合国際学研究科概要— 3
 修了生メッセージ— 4
 Pick up 英語教育学プログラム— 7
 Pick up 英語通訳翻訳実践プログラム— 9
 博士前期課程— 10
 修士論文— 19
 キャリア・プログラム— 20
 博士後期課程— 22
 教員一覧— 26
 就職先— 28
 研究科長メッセージ— 29
 入試情報— 30

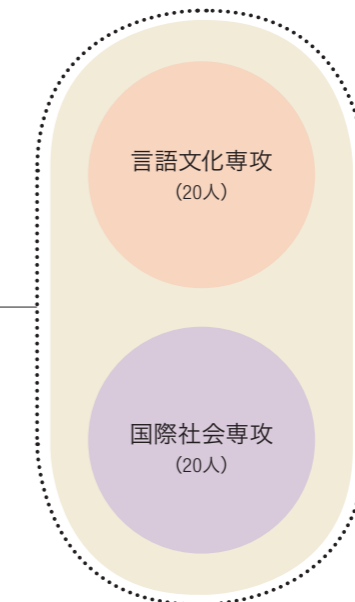
世界を学ぶ、 日本を学ぶ 博士前期課程

世界言語社会専攻と国際日本専攻の2つの専攻からなっています。



人文社会科学 諸分野を究める 博士後期課程

言語文化専攻と国際社会専攻の2つの専攻からなっています。



東京外国語大学大学院総合国際学研究科は、世界諸地域の言語・文化・社会をめぐる個別かつ総合的な研究を主体とする我が国でも有数の教育機関であり、これらの分野における国際的拠点としての使命を担っています。

従来から我が国と交流関係の深かったアジア地域、ヨーロッパ地域、アメリカ地域の言語・文化・社会に関する研究と教育では、百年を超す伝統を誇っています。その後、本学が研究・教育対象とする地域は拡大し、現在では、東南アジア、中東、東欧諸地域の言語・文化・社会の研究と教育も行うなど世界的な拠点となっています。また、日本研究および日本語教育の国際的拠点でもあります。

このような背景をもつ本学大学院は、研究者を含む高度職業人の養成を目指しています。グローバル化の進行する現代社会で真に貢献できる人材には、専門分野でのより深い知識や高度な技術が求められています。本学大学院は、研究力に加え、総合力、実践力、そして世界で活躍するうえで必要な日本力を身につけ、世界と日本でグローバルに活躍することを目指す皆さんの挑戦を待っています。

01

2003年大学院博士前期課程修了
英語教員

田中敦英さん



学部時代はESSに所属。
スピーチ・プレゼンテーションの経験が今に役立っている。



2016年春からNHKラジオ「基礎英語1」の講師に。
教材テキストの執筆もやっている。

大学院は理論と実践の融合の場

大学院を出てから母校の桐朋中学校・高等学校の英語教員となり、今年で14年目を迎えます。学部3年で教職の道を決めていた私にとって、大学院は理論と実践の融合の場でした。

根岸雅史先生の下で英語教育学のテスト論や評価法などを学びながら、週に2、3回は私立高校で英語の非常勤講師を務めるという毎日。実際に生徒と向かい合う現場では、学部や大学院で学んだ理論の有効性を実感する一方で、実践とのギャップに気づくこともあり、それをまた研究に活かすという形で、非常にいいサイクルで研究生活を送ることができました。

私自身の研究テーマは「言語テストのフィードバック」という比較的ニッチな分野でした。それが現在の自分の授業実践に直接役立っている度合いは高くないのですが、大学院を通して学んだことすべてが、今では血となり肉となっていることは断言できます。

例えば、根岸ゼミでは英語の技能テスト「GTEC for STUDENTS」の前身「英語コミュニケーション能力テスト」のサンプル作成に携わることができましたし、「TUFS言語モジュール」の開発プロジェクトにも参加しました。いずれも資料調べをはじめかなり大変

な作業でしたが、今振り返れば、非常に貴重な体験でしたし、英語講師とはまた違う意味で、社会とのつながりをもつことができたことに感謝しています。

大学院では自分の研究テーマをnarrow downする(絞りこむ)ことが必要だとよく言われます。確かにそうなのですが、そうして自分の研究のコアのようなものが形成されると、今度は逆に、その周囲にさまざまな研究分野がつながっていることが見えてきます。それに伴って他の研究者とのネットワークも生まれ、研究生活がより豊かになっていったような印象をもっています。英語コミュニケーション能力テストや言語モジュールの仕事も、そういう意味では大学院での研究に幅と奥行きを与えてくれたといえるかもしれません。

教育の現場にいと、生徒たちの意識の変化というも如実に伝わってきます。例えば十数年前であれば、授業の音読で英語を英語らしく発音すると笑われるような雰囲気があったと思います。それが今では、あまりに拙い発音をしていると恥ずかしいという感じに変わってきています。これはもちろん社会の変化とも連動していると思いますが、英語教育もそれに合わせて進化していかなければと痛感しています。

私自身は、大学院の英語教育学専修コースが始まる前に修了してしまったのですが、このコースはうらやましいほどに恵まれた研究環境だと思います。自らの研究テーマを究めながら、英語教員としてのスキルを磨きたいと考えている人には非常に魅力的なカリキュラムでしょう。理論と実践の融合をより身近に体験することができるわけで、それは将来研究を続けていこうと考えている人にとっても有意義だと思います。

そして大学院生活を通して得られる修了生同士のつながりも大きな財産になるに違いありません。実は私自身、2016年4月から務めているNHKラジオの講師の仕事も、そうしたネットワークの中からご縁をいただいたものです。将来研究者になるにせよ、教育者になるにせよ、大学院での研究とそこでの人との出会いから、いろいろな道が広がっていると実感しています。

Tanaka Atsuhide

1979年東京都生まれ。東京外国語大学外国語学部(欧米第一課程)英語専攻卒業。同大学院博士前期課程(ヨーロッパ第一専攻)修了後、母校でもある東京・国立市の桐朋中学校・高等学校の英語教員に。著書に高等学校英語教科書「English Navigator I」(共著、旺文社)など。2016年4月からはNHKラジオ「基礎英語1」の講師も務めている。

02

2006年大学院博士前期課程修了
ベットフォードシャー大学講師(英国)
井上千尋さん



英検、IELTSなど多くの英語テストの研究に携わった(左端)。

言語テスト論に魅了され大学院に進学

東京外大には、学部から大学院博士後期課程1年までの通算7年以上お世話になりました。学部時代に教職と言語学関連の授業を多く履修しましたが、その中でも言語テスト論に出会ってからの面白さに魅せられ、大学院進学を決めました。

博士前期課程はゼミ形式の授業が多く、専門書や論文を読んで議論し、エッセイを書くことで論理的思考力が鍛えられました。また、さまざまな視点

からものを検討することの重要性を教わりました。学生層も幅広く、現職の先生や社会人入学の学生も多かったので、授業はそれぞれの考えや経験談をシェアする貴重な場でした。

修士論文を書くにあたって、根本のアイデアからそれをどう調べるかという方法論まで、指導教員の先生だけでなく関連分野や統計の先生方にも相談しました。分野の第一線で活躍されているながら、学生の指導も熱心にして

くださる先生ばかりです。まさに「こういう大学の先生になれるように頑張ろう」と思わせられる指導を受けられたことは、現在の仕事にも大いに通じる財産であったと思っています。

Inoue Chihiro

東京外大大学院博士後期課程に進学後、英国ランカスター大学大学院博士課程修了。英検、IELTSなど英語テストの研究開発プロジェクトに携わる。Japan Times ST新聞にコラム連載中。

03

2009年大学院博士前期課程修了
ケンブリッジ大学理論・応用言語学科
リサーチアソシエイト
村上 明さん



ケンブリッジ大学の学位授与式でPhDを授与される。

文理融合のアプローチで言語研究に貢献

大学院の英語教育学専修コースの長所は、英語教育に関係する授業が幅広く開講されていたことと、他コースの授業も比較的自由に聴講ができたことです。英語教育の中心的な領域である第二言語習得論や言語テスト論、語彙指導などの分野のみならず、コーパス言語学や自然言語処理、言語統計といった、さまざまな関連領域・近接領域についても学べました。

私の研究は、大規模言語データから

自然言語処理技術などを用いて情報を抽出し、それを統計学や機械学習の手法を用いて分析することにより、第二言語習得研究などの言語研究に貢献することを目的としています。

このような文理融合型の研究に必要な知識・技術を得ることができたのは、同コースならではのと思っています。その結果、世界各国の大学の言語学科はもとより、教育学科、心理学科、認知科学科などでも関連する職があり、

キャリア上も選択肢が豊富です。

英語教育といういわゆる文系の印象が強いかもしれませんが、私のように学際的領域での素養を身につけることもできるのです。

Murakami Akira

2013年東京外大大学院博士後期課程退学。2014年ケンブリッジ大学理論・応用言語学科博士課程修了、バーミンガム大学英語・応用言語学科リサーチフェローを経て、2015年より現職。

Pick up

英語教育学プログラム

英語教育を学際的に研究する

博士前期課程の英語教育学分野の特徴は、英語教育学を、分野に関わるさまざまな学問領域とともに学ぶことができる点です。英語教育学は学際的な研究分野で、その下位分野や隣接分野は多岐にわたりますが、本学ではそうした諸分野についても充実したカリキュラムが提供され、複数の専任教員による連携・協力した指導体制が実現されています。

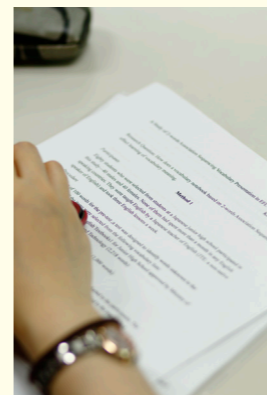
具体的には、(語彙指導、文法指導、タスク活動などを中心とする) 英語教授法、小学校英語などの言語指導に関する分野、リサーチ・デザインや統計

学などの研究方法に関する分野のほか、言語テスト研究、CEFR研究を含む言語能力評価研究、コーパス言語学、第二言語習得などの分野が、専任による授業として開講されています。これ以外にも、言語学、英語学、音声学、心理学などの英語教育に関連する分野も専任による授業が開講されています。また、非常勤の先生方による授業では、リーディング論、ライティング論、リスニング論、スピーキング論、英語授業学、教材論などが開講されています。

これらの授業は、先端的な教育・研究を行っている教員により開講されて

いるというの大きな特徴でしょう。また、学内では、日本のみならず、世界でも注目されるような英語教育学研究が進められており、学生は早くからこうした研究に触れ、参加する機会が与えられています。

こうした先進的な教育の成果として、日本の英語教育界をリードするような中高の英語教員のみならず、国内外の大学の研究者、英語教育関係の出版社やマスコミ、英検やTOEIC事務局などの言語テスト教材開発機関で活躍する人材などを本学は数多く送り出しています。



04

2012年大学院博士前期課程修了
防衛省
平賀陽子さん



米国防省での会談で通訳を担当(防衛省提供)。

大学院での学びが実務に直結

「英語を使う仕事」といってもさまざまですが、私はまさに通訳コースで学んだ通訳・翻訳スキルを使って仕事をしています。

各種会議や高官への表敬訪問時に日英通訳を担当したり、出張に同行し各国政府高官や専門家との意見交換の場で通訳を務めたりする機会も得ました。資料等の翻訳作業もあります。防衛・安全保障分野の翻訳は一筋縄ではいきませんが、だからこそ学生時

代から取り組んできた「いかに伝えるか」を考えることにやりがいを感じています。また、気持ちのもち方から通訳準備の仕方に至るまで、大学院時代にクラスメイトとともに励んだ練習や先生方からいただいたさまざまなアドバイスに助けられており、大学院で学ぶことがいかに有利であるかを日々実感しています。

通訳コースで得たものは、学生時代には想像できなかったほど有意義なも

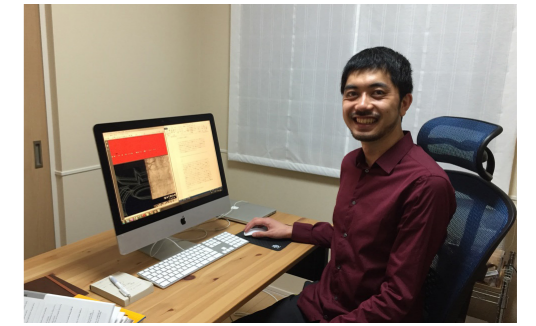
のとなり、スキルを活かせる仕事へと導いてくれました。修了後のキャリアに直結して役立ったのは、東京外大大学院で通訳・翻訳訓練を受けることが魅力的である所以だと思います。

Hiraga Yoko

東京外大英語専攻卒業。学部時代にはカナダ(UBC)へ交換留学。通訳コース修了後、防衛省内部部局にて勤務。主に日米関係の防衛政策分野で、語学専門職員として通訳や翻訳業務を担当。

06

2010年大学院博士前期課程修了
翻訳家
江原 健さん



通訳の手法で翻訳をすると納得のいく仕上がりに。

大学院での通訳経験を翻訳業に活かす

現在はフリーランスの翻訳者として、企業のウェブサイトやプレスリリース、ソフトウェア、書籍などを中心に翻訳しています。

大学院での経験で特に大きな糧になっているのは、学内の講演会を通訳したことです。こうした「実習」の機会には年に数回あり、ビジネス、金融、文学といったさまざまなテーマの講演を通訳し、実際に聴衆の反応を目で見て、肌で感じることができます。実習後には、録

音した自分の通訳を文字に起こし、反省点をまとめます。ただ黙々と通訳するのではなく、このように実際に講演の要点を理解できたか、そして聴衆に伝えられたかを繰り返し体験し考えたことで、通訳の技術が鍛えられました。

翻訳は文字情報しかないで、どうしても一字一句を訳すことにとらわれて、無機質な訳になってしまうことがあります。そんな時に通訳のつもりで読み、書き手の主張は何だろうか、スピー

チだとしたらどこを強調するだろうか、この文章で明確にメッセージが伝わるだろうか、などを考えながらやると、文章を立体的に理解できて、納得のいく仕上がりになります。

Ehara Takeshi

大学院博士前期課程国際コミュニケーション・通訳専修コース修了後、(株)ヒューマンサイエンスに勤務。2014年よりフリーランス翻訳家。産業翻訳を中心に、書籍の翻訳も手がけている。

05

2010年大学院博士前期課程修了
三菱東京UFJ銀行
石本洋晃さん



シンガポールでのチームとの夕食会(後列右から2人目)。

言葉は自分と外の世界をつなげてくれる

通訳・翻訳を中心に勉強しながら、より高度な国際コミュニケーション能力を身につけたいと考え、国際コミュニケーション・通訳専修コース(※)に進学しました。すばらしい先生方と仲間に出会え、言葉がもつ力、その可能性に気づくことができたことが大学院で得た最も大切なことです。

言葉をプロフェッショナルなレベルまで追求して勉強するということは純粋な言語学習には留まりません。言葉

を通してその背景について学ぶ。話し相手の文化、思考にまで気を配り、相手の真意を理解する。自分の伝えたいことを伝えられるよう真剣に考える。言葉は自分と外の世界をつなげてくれると、私は信じています。

3年弱におよぶシンガポールでの勤務を経て、現在、銀行のグローバル戦略を企画・立案・遂行する部署にいます。手探りで飛びこんだシンガポールで沢山の仲間と信頼関係を築けた

のも、現在、今後の当行の戦略や業務方針を大きく変えるような難易度の高い施策を推進するチームにいることも、「言葉」がきっかけとなって開いた私にとっての新しい世界です。

Ishimoto Hiroaki

大学院博士前期課程国際コミュニケーション・通訳専修コース修了後、三菱東京UFJ銀行勤務。3年弱のシンガポールでの勤務を経て、現在、グローバル戦略を企画・立案・遂行する部署に在籍。

※現在は、言語文化コースの中で、同内容のプログラムが履修可能

Pick up

英語通訳翻訳実践プログラム

起点言語を理解し、目標言語で表現する

大学院前期課程で通訳・翻訳を学ぶことの大きな特徴は、2年間で理論と実践の両方をバランスよく行う点にあります。

修士1年の学びの中心は通訳理論と逐次通訳です。逐次通訳の完成を目指してスキルの習得に務める一方、修士論文もしくは修士研究(用語集編集・日英翻訳)を仕上げるために特に自分が興味をもったテーマを追求し続け、1月末の構想発表会でテーマを発表します。一方で逐次通訳スキルについては、2年生の論文発表会を逐次通

訳するのが、公の場で通訳を行う機会となります。

修士2年は同時通訳の授業と実習を運営する授業を受けつつ、論文の完成を目指します。2年の春学期に行う



中間発表会を経て、12月初めに仮提出し指導を受けて1月に本提出、2月の論文審査を経たあとで論文発表会を行います。

また2年間を通じて実践のための通訳実務の授業も設けられており、日本通訳翻訳学会に参加して発表することも奨励されています。

通訳・翻訳の真髄は起点言語で語られている内容を理解し、目標言語において的確にわかりやすく表現することにある、それは理論と実践の両方において貫かれている基本となっています。

世界言語社会専攻

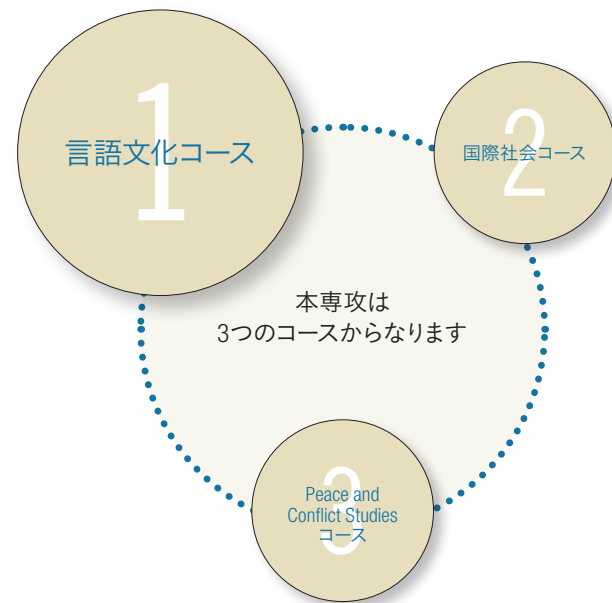
世界言語社会専攻では、世界諸地域の言語・文化・社会や国際社会を、複合的・総合的に捉える視点から研究し、地球社会化時代にふさわしい多言語グローバル人材を養成します。

言語文化コース

本コースでは、東京外国語大学における言語研究および文化研究の長い蓄積を活かし、世界諸地域の言語・文化に関する専門的教育研究を推進します。英語教育や実践的な通訳翻訳教育も、本コースに含まれます。言語研究の分野では、個別言語に関する文法論や形態論、意味論、語用論などのほか、一般言語学や社会言語学、対照言語学、音声学、言語情報学などを扱います。文化・文学の分野では、世界の諸言語で書かれたテキスト(詩、小説、哲学、思想など)に依拠した研究や、伝統文化や超域文化、古典文化を扱う研究が可能です。本コースでは、世界の言語現象や文化現象への理解を深め、複雑化する言語や文化の状況をより正確に把握し、対処する能力をもった人材を養成します。

【専門科目群】

英語・英語教育学研究、ヨーロッパ・アメリカ言語研究、アジア・アフリカ言語研究、言語学研究、音声学研究、言語情報学研究、認知科学研究、通訳翻訳実践研究、ヨーロッパ・アメリカ文学文化研究、アジア・アフリカ文学文化研究、古典文学文化研究、人間文化研究

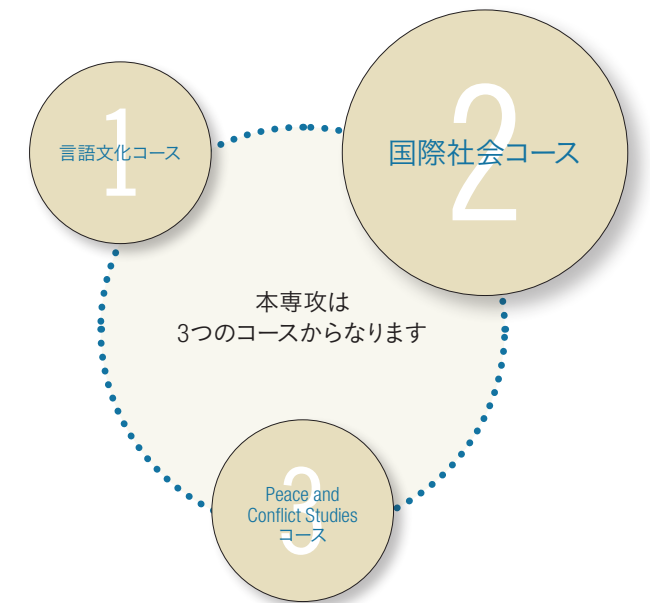


国際社会コース

本コースでは、世界諸地域の社会ならびに国際社会に関する専門的教育研究を推進し、コーディネート力、コンフリクトへの耐性を備えた人材を養成します。キーワードは、ローカルとグローバルです。そして、求められているのはその2つの融合です。ローカルな地域研究はもはや存在しません。地域概念そのものがグローバル化によって再編成されているからです。一方、グローバルな国際関係論や政治学、経済学の研究もローカルな現実への理解なくしては、問題の真相に迫ることができません。本学の国際社会コースは、東京外国語大学における長年の地域研究の蓄積を活かし、グローバル化する現代社会を深く理解し、問題解決に資する人材を養成します。

【専門科目群】

ヨーロッパ・アメリカ地域研究、アジア・アフリカ・オセアニア地域研究、現代世界論研究、国際関係研究



教員メッセージ

Message

八木久美子

大学院総合国際学研究院教授



私のゼミは題目名から、アラブ世界のイスラムという宗教について学ぶゼミと思われるかもしれませんが、それだけではありません。確かに私の研究対象がアラブ世界のイスラムなので、この地域に関する題材を扱うことが多くはなりますが、このゼミの狙いは、より広く宗教という現象を分析する方法、多様なアプローチを習得することです。実際に、アラブ世界だけでなく、さまざまな地域の宗教や文化を研究している学生が参加しています。自分のフィールドに閉じこもらず、異なる地域を研究対象とする学生とともに学ぶことで、思いがけない着想が得られるのではないかと思います。

在学生メッセージ

Message

今井健人

博士前期課程1年



「抽象」と呼ばれる絵画の誕生と、それをめぐる批評行為について研究しています。現在は、米国人画家サイ・トゥオンブリー(1928-2011)の絵画を中心に取り組んでいます。この画家は、子供の落書きにさえ思われるような絵画を遺しています。一体、何が「落書き」と「作品」とを隔てているのか。現代の作品はしばしば「よくわからない」ものだと見なされています。しかし、我々と作品との間のこの「溝」こそが、我々に思考を促し、日常に新たなまなざしを与えてくれるように思われます。これは芸術が自然の模倣を止めてなお、今日も創造され続けている理由の一つではないでしょうか。

教員メッセージ

Message

金井光太郎

大学院総合国際学研究院教授



アメリカを通じて歴史とは何かに迫っています。合衆国という一見わかりやすい国が入植以来400年間に、建国以来200年間にどのように変動したか。この間、自由と平等そして幸福も決して同一であったわけではありません。人はなぜ差別をし、また改革できるのか。改革を逆行させることもある。そうした人間の複雑さを知り、現在の自己の常識を疑い、時代の趨勢を理解し多様な可能性からどのような世界を選び取ってゆくか、そのための知性を磨くことが目的です。クラスでは難解な書物を読みます。それを読みこむことで既存の知を壊し、新たな知へと成長することを目指しています。

在学生メッセージ

Message

千野希

博士前期課程1年



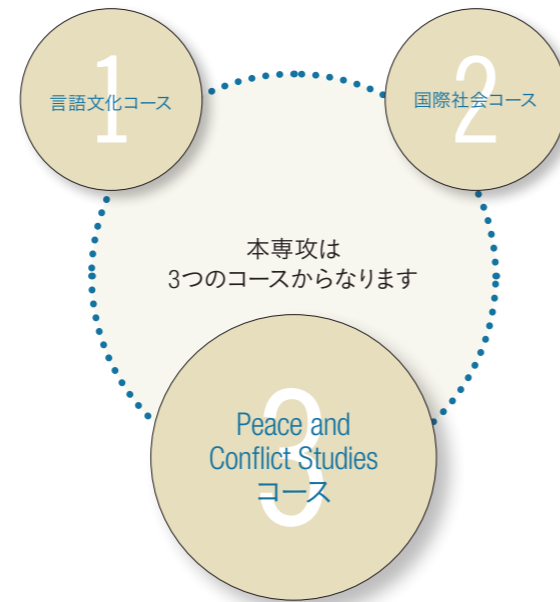
都市空間は、上から新たに文字を書き加えた羊皮紙、パリンペストのようだとされます。都市もまた、歴史が幾層にも積み重なって成立しています。表層からは見えにくい政治性や歴史認識は、再建や復興の過程を研究することで明らかになります。卒業論文では、第二次世界大戦後のヴロツワフにおける都市復興について執筆しました。現在は、同じく社会主義体制下で復興が行われた、東ドイツの都市を研究しています。先生方や友人に囲まれながら、刺激的な日々を送っています。さまざまな場面で新しい発見に出会えることが、大学院生活の楽しみです。

Peace and Conflict Studiesコース(10月入学)

紛争を抱えた地域の諸大学とのネットワークを活用した紛争・平和構築に関する研究を推進し、国際社会で活躍し、平和構築に寄与する国際的リーダーを養成します。教育はすべて英語で行われます。

Peace and Conflict Studies (PCS) Course
(October Admission)

Peace and Conflict Studies (PCS) is an interdisciplinary research and educational program launched in 2004. It aims to fulfill the recognized need in many parts of the world for professionals with expertise in peace and conflict, violence, peacebuilding, and other related global and transnational issues. Each year the program admits a small but diverse group of individuals from all over the globe and provides them with unique opportunities to learn critical approaches to the issues of utmost importance to many people in today's conflict-laden world. All courses are held in English.



教員メッセージ

Yasuyuki Matsunaga

Professor, Graduate School of Global Studies

I teach an introductory seminar on conflict and contentious politics. The goal of this seminar, titled PCS Research Methodology, is to introduce to incoming PCS MA students social scientific approaches to studying conflicts and conflict-related political processes. The PCS program at TUFS attracts students from divergent backgrounds, not only in terms of their countries of origin but also in terms of their previous academic and professional trainings.

Therefore, in order to ensure that they are on the same page, roughly speaking, we start with foundational readings on the goals of social scientific inquiry and what constitutes explanation in various social scientific traditions. Then we cover such topics as theories of conflict, divergent conceptions of group identity, the mechanisms and processes of collective mobilization and political violence, and analytical approaches to culture and contentious politics. We also read and discuss books and articles that analyze, and sometime advocate, nonviolent approaches to social activism and radical reforms.

Prior to each class meetings, the students receive the week's reading materials and corresponding assignment questions.

They are asked to write well-thought-out and nuanced answers to the questions and send them to me via email by the night before each class meeting. The purpose of these assignments is to help the seminar participants be better-prepared for three-hour-long critical and collective engagement with the materials. To ensure further that the participants get the opportunity to review the materials again weeks later, I give the students an in-class midterm examination and a final-take-home assignment. The students also receive the list of recommended readings on each topic that the seminar covers so that they may continue reading based on their individual interests.

This is the structure of the introductory seminar that I have taught every year at TUFS's PCS program since 2008. Those students who have found it useful go on to take the follow-up seminar entitled Advanced Seminar on Conflict and Contentious Politics in the ensuing semester. A number of students have chosen to work on their thesis topics using some of the analytical approaches this seminar covers.



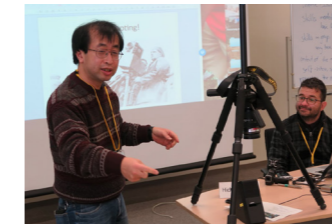
Message

アジア・アフリカ・フィールドサイエンス・プログラム

世界言語社会専攻の複数のコースを横断するプログラムとして開設されています。「フィールドサイエンス」とは、臨地調査(フィールドワーク)を理論的・実践的に高度化した研究手法のことです。この手法を用いて、アジア・アフリカの諸地域に分け入る研究を指導します。

本プログラムは、専攻共通科目の「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス基礎」、「アジア・ア

フリカ・フィールドサイエンス実践研究」、言語文化コースの「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス言語研究」、国際社会コースの「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス地域研究」からなっており、本学のアジア・アフリカ言語文化研究所の教員が指導します。夏学期には、他大学の学生とともに学ぶ「中東イスラーム教育セミナー」が、本プログラムの一部として開催されます。



在学生メッセージ

Marie Catherine Ndeo Ndiaye

Second-Year PCS Student

When wishes and matching existing opportunities meet, they create only good outcomes. Ever since an undergraduate student, I have been cultivating a desire for working locally for international organizations. My passion for peace and conflict studies dates a few years back when I was attending a peace studies class during a one-year exchange program at a Japanese university. In addition to that I also paid a random visit to the Hiroshima Peace Memorial Museum, as a field trip with other colleagues working on a project about peace and sustainability regarding Africa. The field work can be considered as the debut of a process that led me to be integrated in the Peace and Conflict Studies program in this university. Those steps did motivate me to apply for TUFS' PCS Master's Program.

In simple terms, this educational program does not only give the opportunities to learn in depth about the real society we live in, in terms of conflict, peace and solving/preventing and maintaining them; but it also instructs the students as individual elements of the society what one can do for the world.

After spending the first few months, I learned new ways of analyzing societal issues and I have come to see societal evolution highly liable to get transformed. For this reason, I personally started working on contentious politics in Senegal because the current critical view that I have about political contention in my country is completely different from the ones I had before joining PCS. My research interest focuses on the delicate and thin margin which gets installed when social movements and political power engage into violent actions and the latter can drift their society away from a peaceful one. It is noticed that in many democracies, the appearance of the civil society and social movements is getting more and more recurrent now compared to less than twenty first years ago. And the explanation of that is hidden in different aspects of the current world order.

After graduating from this PCS Master's Program, I am looking forward to working for an international organization as I used to long for it. If not, my current research project is giving me more passion to continue on comparative politics and become a researcher on contentious politics.

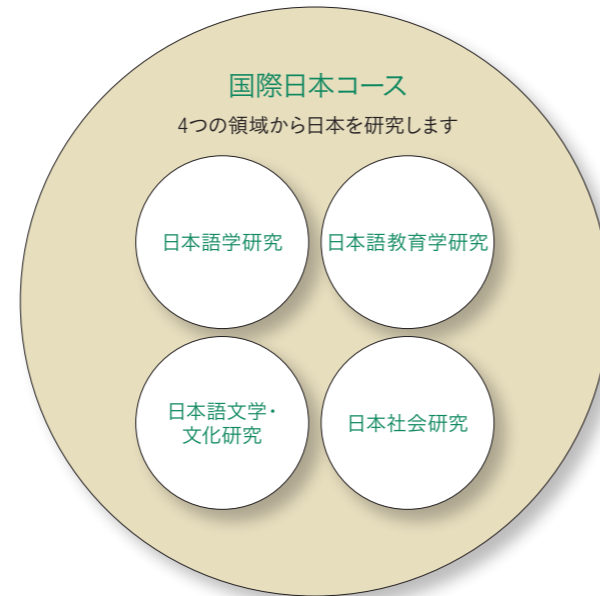


Message

国際日本専攻

国際日本コース

世界の諸言語の中での日本語・日本語教育、世界の多様な文化・社会の中での日本文化と日本社会を比較の視座をもって研究し、日本についての客観的な視座をもつ人材を養成します。研究領域としては、「日本語学研究」「日本語教育学研究」「日本語文学・文化研究」「日本社会研究」の4つで構成されます。しかしそれぞれが分立するのではなく、接近する形で研究・教育を行っています。4つの領域をまたがる形で研究することで、全体として日本への理解を深めることができます。



専攻長メッセージ

早津恵美子

大学院国際日本学研究院
研究院長/教授



国際日本専攻は、「国際日本コース」と「日本語教育リカレントコース」の2つのコースからなります。

国際日本コースは、「日本語学研究」「日本語教育学研究」「日本語文学・文化研究」「日本社会研究」の4つの研究領域で構成されていて、それぞれの授業が開講されます。皆さんはいずれかの研究領域を究めることになるでしょう。

しかし、各自の専門の核をもちつつも、そこに閉じこもってしまうのではなく、まわりの領域に目をむけそこから学ぶことで、自身の核をより豊かにしてほしいと思っています。

「日本語教育リカレントコース」は、海外で日本語教育に従事してきた経験者を対象としたユニークなコースで、1年間で修了して修士号を取得します。単なる教員養成プログラムではありません。これまで研究という視点で日本語に接する機会が少なかったかもしれない方々に、あらためて日

本と日本語について学んでもらいたいと考えています。ただし、日本語教育リカレントコースの授業は、国際日本コースの授業と別だてになっているわけではありません。したがってそれぞれのコースに属する学生同士が、授業などを通して、相互の経験や関心をもとに互いに刺激し合い学び合うことができます。それができるのもこの国際日本専攻の魅力です。

東京外国語大学には、海外からの留学生への日本語教育をはじめとして、日本・日本語の研究・教育における長い歴史と豊富な実績があります。そして、日本の言語・文化・社会を、世界の諸地域のそれらの中で相対的に捉え、個別のなかに一般を、一般のなかに個別をみいだそうとする研究・教育を行ってきました。そういった東京外大で、日本と日本語についての良質な教養を身につけて、「日本発信力」を強化してほしいと期待しています。

国際日本専攻では、世界の諸言語の中での日本語・日本語教育、世界の中の日本文化と日本社会を比較の視座をもって研究し、日本についての客観的な視座をもつ人材を養成します。

在学生メッセージ

Message

Flavio Figueira

博士前期課程1年



対照的な視点から日本語からポルトガル語への翻訳について研究したいと思い、言語研究に強みをもつ東京外国語大学の大学院を目指しました。特に日本語の役割語—いわゆる言語上のステレオタイプ—を中心にしています。日本語の役割語の言語的な特徴に着目し、ポルトガル語でどのような言語的な特徴のもとで対応しているかを分析しています。

将来は博士前期だけではなく、博士後期まで進み、教師でありながら、研究者の活動もしていきたいと思っています。そのうえで、日本語とブラジル・ポルトガル語の間の研究に貢献できれば幸いです。

在学生メッセージ

Message

高田麻由

博士前期課程1年



2013年の夏から2年間、青年海外協力隊に参加し、日本語教師としてバングラデシュに派遣されていました。日本語を学びたいと考えている多くの学生や熱心な先生たちと触れ合い、もっと深く日本語教育について学び、彼らの役に立ちたいと考えたことが大学院進学への動機です。

大学院では、協力隊での経験を活かして、海外の日本語教育に焦点を当てた研究をしています。大学院在学中にも海外でフィールドワークに出て、現場で実際に起こっていることに焦点を当てたいと考えています。将来は海外の現場に戻って、より専門的な仕事に携わりたいと考えています。

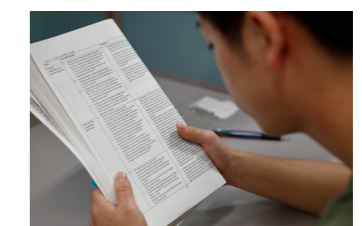
日本語教育リカレントコース(1年・10月入学)

日本語教育リカレントコースは、海外で働く現職の日本語教育者を対象に開設されました。本学で1年間、勉学・研究に専念して学位(修士号)を取得し、その後、所属機関に戻り、日本語教育の発展に貢献する道を歩む方が、募集の対象となります。

入学時期は、10月です。応募資格は、①3年以上の日本語教育歴をもつこと、②出願時において

日本国外に居住していること、③日本語が母語でない方については、日本語能力試験 N2以上を取得していること、などです。

第一期となる今年(2016年10月入学)は、ベトナム、タイ、モンゴルなどで日本語教育に従事されている方々が合格しました。世界各地の教育現場で日本語を教えている方々の応募をお待ちしています。



日本語学研究

本領域では、国際的な視野に立ち東京外国語大学で教育研究される「外国語」の一つとして「日本語」を扱います。日本語の文法(構文論・形態論)、語彙論、語用論、日本語の歴史、さまざまな方言の特徴や分布、他の言語との比較による対照日本語研究などを研究することが可能です。日本語を深く知ることとは、日本語を教えるうえでも不可欠です。日本語学を研究し、日本語教育の道に進む方も少なくありません。

[専門科目群]

日本語学研究、対照日本語研究

教員メッセージ

Message

花蘭 悟

大学院国際日本学研究院
准教授



私の専門は現代日本語文法、特にモダリティ(文の「述べ方」)ですが、日本語を教えはじめてから記述が不十分なことに気づいた複合助詞や、日本語研究に大きな足跡を残した奥田靖雄氏を中心とした現代日本語学史にも興味をもって調査しています。また日本語教育の方法を応用して、博士論文執筆中に興味をもった沖縄語の教科書作成も行いました。授業では「対照日本語研究」として沖縄語を文型積み上げ方式で学びます。院生にはさまざまな言語や諸方言、古代語などとの対照を通じて、現代日本語を相対化する視点をもって研究してくれることを期待しています。

日本語教育学研究

日本語教育の需要は国内外で高まっています。本領域では、語彙意味論、語用論、文法論、理論言語学、認知言語学、社会言語学、第二言語習得理論、教授法、コースデザイン論、教材研究、評価法、談話分析、異文化コミュニケーションなどの授業を通じ、多面的に日本語教育を学びます。学問的な知識と研究能力を身につけ、日本語教育実習で得た実践力をもって、指導的な立場に立って日本語教育の現場を牽引していくことのできる人材を養成します。

[専門科目群]

日本語教育学研究、日本語教育実践研究

教員メッセージ

Message

石澤 徹

大学院国際日本学研究院
講師



この科目は複数の教員が担当しており、日本語教育の実践現場と理論を多角的な視点で分析していきます。私の授業では、特に日本語の音声教育を例に、言語教育・言語習得の観点に立った研究について知識を深めながら、学習者が日本語を学ぶ際に何が問題となるのか、教師はどのようなことを考慮するべきかについて考えていきます。授業のなかでは、受講者が自身のテーマに基づく発表も行っています。授業を通して、日本語教育学における研究の概観・批判的検討を行い、受講者自身の研究を深める第一歩となることを目指しています。

日本語文学・文化研究

本領域では、古典文学、現代文学、文化研究などを学びます。とはいえ、本領域は、一般的な「国文学」のコースとは違います。それは、海外からの多くの留学生と日本人の学生と一緒に学ぶことで、外からの目をもって、日本語で生み出された文学・文化を検証することを目指しているからです。外国文学としての日本語文学、グローバルな現代日本の文化など、テーマは世界に向かって開かれています。対象となるテキストの解釈などは、日本語の原典を用いて、国文学など従来の「学」の成果を十分に取り入れ、厳密に行うことは、言うまでもありません。

[専門科目群]

日本語文学・文化研究、日本比較文学・文化研究

教員メッセージ

Message

村尾 誠一

大学院国際日本学研究院
教授



私の専門は日本古典文学です。研究の中心は、12世紀から16世紀の和歌文学の表現をはじめ諸相の分析となりますが、そこを核に、広い範囲に研究を展開させようとしています。授業は、日本語文学・文化研究では、春学期に古典文学の基礎、秋学期に書誌学(古典の書物に関する学)の基礎を学べるようにしています。日本比較文学・文化研究では、研究室の院生達が積み上げてきた実績を基に、和漢比較文学の専門的な演習を行っています。テキストにも平安時代の写本の写真版を用いて、厳密な読解をもとに議論を進めるようにしています。

日本社会研究

本領域では、日本社会を歴史、政治、思想、芸術、文化交流といった角度から多様なアプローチで研究します。また、本学教員に加え、世界トップレベルの7機関で構成されているアジア・アフリカ研究教育コンソーシアムから招聘した優秀な日本学研究者により、日本語・英語の両言語での教育を提供します。そして、世界とのつながりの中でグローバルな視座から日本文化を捉え、広く国内外に発信できる人材の育成を目指します。

[専門科目群]

日本社会研究、国際文化交流研究

教員メッセージ

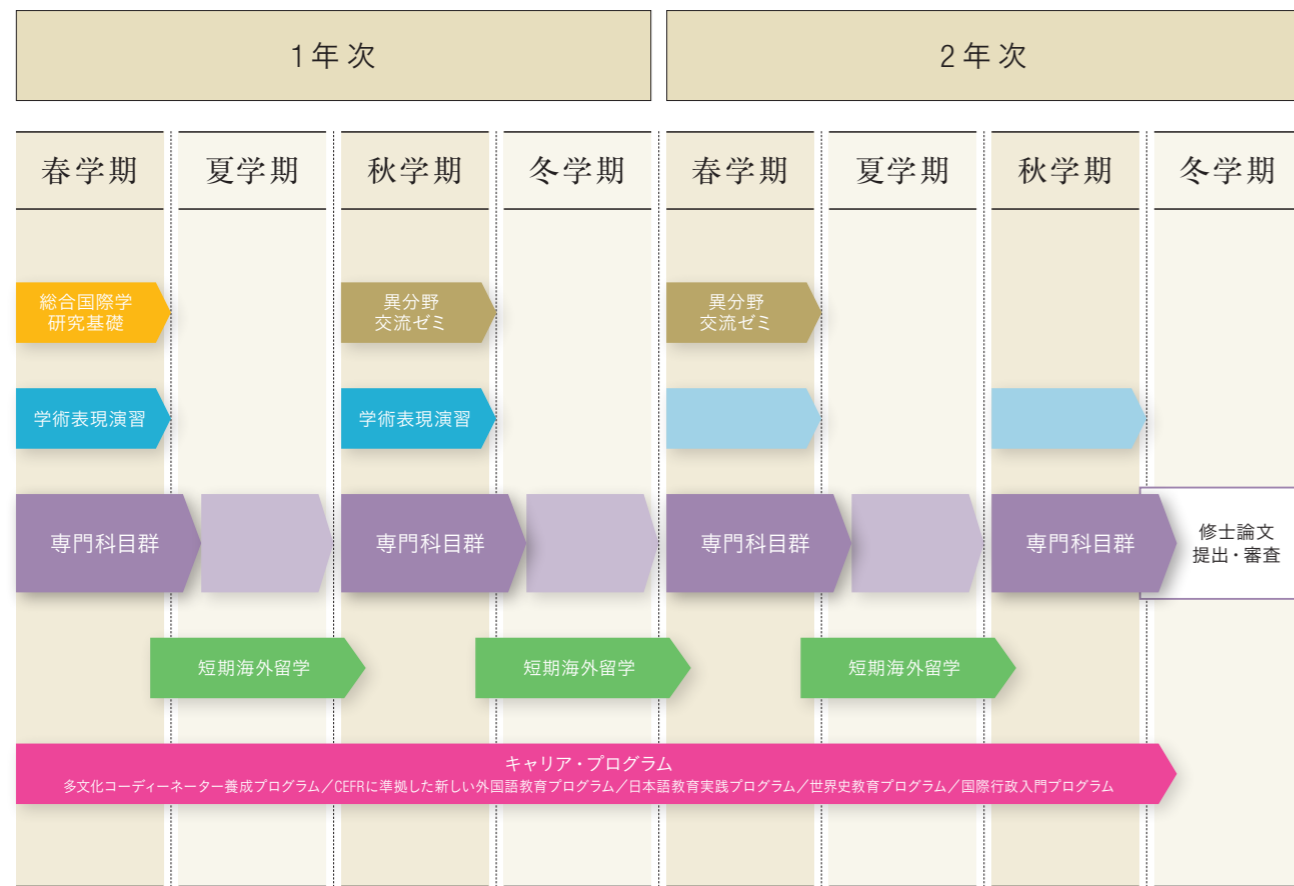
Message

ジョン・ポーター

大学院国際日本学研究院
講師



「19世紀日本の巨大都市における貧民の救済と統制」というテーマのもと、幕末・維新期の公文書や地域史料を読んでいきます。活字史料から読んでもらい、史料に即した社会像を構築するという実証的な歴史学研究方法を学んでいきます。併せて19世紀日本の都市社会の実態にも言及していきます。テーマの設定は『史料集 明治初期被差別部落』の中で興味をもったもの数個を選択する形で行います。その史料が問題としている諸事象をテーマにし、各自テーマを小グループで担当。各グループは、授業中に一回の発表を行い、期末に簡略な成果報告を提出してもらいます。



修了に必要な単位は30単位です。上記の科目などから研究計画に合わせてカリキュラムを作ることができます。

総合国際学研究基礎
研究を遂行する
基礎力を身につける

大学院生としてスタートを切る1年次春学期に、研究に必要なリサーチ力、プレゼンテーション力、ディベート力などを身につけ、研究基礎力を養うための授業です。リサーチデザイン、統計手法などに関する講義を受けると同時に、日本語や英語で研究計画をプレゼンテーションする機会も設けます。(2単位必修)

専門科目群
専攻・コースに応じた
多様で専門的な授業群

大学院での学びの中核となるのは専門科目の履修です。指導教員や副指導教員の授業、また関連する分野の教員の授業を履修します。そこでの指導に沿って修士研究を進めます。2年次には、「修士論文修士研究ゼミ」を履修し、修士論文を作成します。

異分野交流ゼミ
分野や地域の枠を超えた
活発な議論の輪

大学院生が数人単位でグループを形成し、分野や対象地域を超えた異分野交流を行うゼミです。異なる広がりをもつテーマを扱う学生が集まり、議論のなかで自身の研究の足がかりを得ることを目的とします。テーマに関わる教員を「招待」し、そのコメントを活用することもスリリングで有用でしょう。(2単位必修)

短期海外留学
Joint Education Programによる
短期海外留学

本学では、春学期(4月～7月初旬)、夏学期(7月中旬～9月)、秋学期(10月～1月中旬)、冬学期(1月下旬～3月)からなるTUFSCOアワード制を採用しています。海外で長期にわたる調査・研究が可能となるように、夏学期と冬学期には必修科目を置いていません。また、夏学期や冬学期を中心に海外協定校と「Joint

学術表現演習
論文を読む
プレゼンをする

次の言語で行われます。英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、ウズベク語、ポーランド語、チェコ語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、インドネシア語、マレーシア語、フィリピン語、タイ語、ラオス語、ベトナム語、カンボジア語、ビルマ語、ヒンディー語、ウルドゥー語、ベンガル語、アラビア語、ペルシア語、トルコ語

Education Program)を行っており、海外協定校の教員のもとで指導を受ける、資料収集や現地調査を行うなど、多様な短期海外留学の機会があります。海外大学のサマーコースに参加する選択肢も豊富です。春に説明会を行うなど、留学支援体制も充実しています。

これまでの修士論文より

世界言語社会専攻

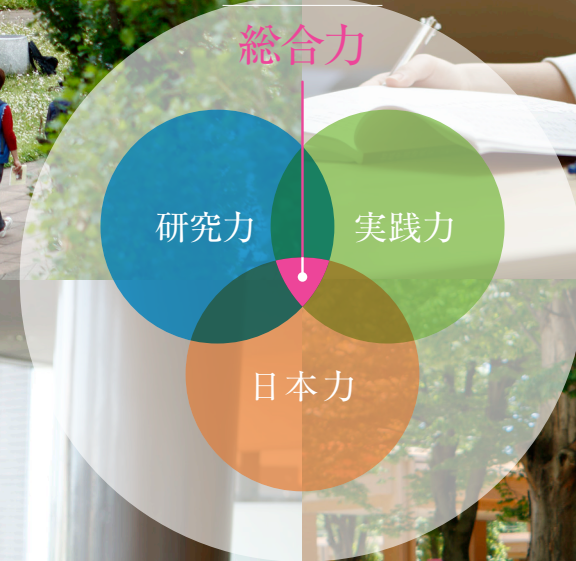
言語文化コース	
研究領域 英語・英語教育学研究	修士論文の題目 日中バイリンガルの英語習得における語用論的影響—謝罪表現に関して 英語誤用コーパスに基づく「of」の誤用分析と「の」の用法との対照研究 日本人学習者による英語冠詞の使用:抽象名詞との使用における語彙的・統語的特徴 日英バイリンガルのナラティブにおける言語とアイデンティティ プロジェクト型学習の小学校英語教育への導入意義～児童のwillingness to communicateから見るプロジェクト型英語教育の効果
ヨーロッパ・アメリカ言語研究	チェコ語の名詞以外の指小語について スペイン語の直説法未来における条件性について 日本人ロシア語学習者のL2ロシア語アスペクト習得における日本語の影響 ドイツ語心態詞の研究—心態詞jaの用法と機能— 現代フランス語において動詞に支配される不変の形容詞に関する統語的分析 ロシア語におけるいわゆる名詞句の統語構造—束縛現象によるDP投射の有無の検証— リヨン地域の方言分布について
アジア・アフリカ言語研究	現代韓国語の形容詞派生接尾辞研究(‘-답-, -스럽-’を中心に) 中国語の(一+類別詞):学習者誤用コーパスに基づく日本語・英語との対照 日本語と中国語における「上」(up概念)の認知意味論的対照研究 現代韓国語の‘害’について—‘害害’の互換性を中心に— 日本語とカンボジア語の授受表現に関する対照研究
言語学研究 音声学研究 通訳翻訳実践研究	ウイルク語形動詞の修飾用法と名詞用法について トーク番組における聞き手の会話展開にみられるストラテジーの分析—ボライトネス理論の観点から— 日英翻訳「外国人相談事業 実践のノウハウとその担い手～連携・協働・ネットワークづくり～」 「松山収容所 捕虜と日本人」の日英翻訳 自然な会話を達成するための翻訳方略とは—アニメ映画「魔女の宅急便」の会話分析から—
ヨーロッパ・アメリカ文学・文化研究	ディエゴ・カルピテラの民族音楽学の特徴について ロルカ文学における「死と生と愛」についての倫理的考察 3つの児童戯曲に見るマルシャークとソ連児童文学の歩み ジョゼ・サラマゴの小説「イエス・キリストによる福音書(1991)」と福音書の比較研究
アジア・アフリカ文学・文化研究	Ch.ロイドインバの小説「清きタミルの流れ」に反映されたモンゴルの伝統的な文化について 朴泰遠長篇小説研究 「内モンゴル映画における「主人公」の人間像の変化と文化的アイデンティティについて」 ジェンダーの視点から見たトルストイと有島「アンナ・カレーニナ」と「或る女」を中心に
国際社会コース	
研究領域 ヨーロッパ・アメリカ地域研究	修士論文の題目 16世紀セビーリャのセマナ・サンタ(聖週間)—「聖週間の日々になされる礼拝と瞑想」翻訳と解題— アメリカ トラベリング セールスウーマンの仕事と自己肯定感(1890～1930年)—エイボンのセールス エージェントとトラベル エージェントを事例に— 海をわたる聖人たち—ノルマン・コンクエスト期における聖人崇敬の環海峽的交流— 政党収斂過程における政党間競争の変容 イタリア・自由の人民と民主党を事例に
アジア・アフリカ・オセアニア地域研究	17-18世紀オイラト・チベットの関係史の研究—オイラト政権の政治的立場を中心に— 帝室博物館長オスマン・ハムディの生涯と考古学的功績 アナトリア東黒海地方の少数民族、ラズ人の文化保護活動の特徴—第一次世界大戦期と現在— 現代バハレーン政治における宗派主義的作用—「アラブの春」以降を中心に— 現代西部ウガンダにおける社会政治的不安定性:ブニョロ王国の歴史に学ぶ
現代世界論研究	集合的記憶における満州開拓民と中国残留日本人—テレビドキュメンタリーと慰霊碑から見る 廃墟に立つミュージアムたち—冷戦終結後の文化空間の相貌— グローバル社会におけるメディアの知覚的影響—ディズニー・プリンセスの「フランチャイズ化」フレームワークに基づく—
国際関係研究	武力行使禁止原則の妥当範囲に関する一考察 一人道的介入の合法性をめぐる諸学説から見えるもの— WEUの変容とEUへの溶解についての考察 欧州統合の背景と、WEUが残した防衛産業の課題とともに 「平和に対する権利」の国際人権法上の意義—国連人権理事会における議論からの考察—
Peace and Conflict Studies コース	
研究領域 Peace and Conflict Studies (PCS)	修士論文の題目 What Makes Primordialism Significant in the Protraction of Violent Ethnic Conflict: The Case of The Mamprusi-Kusasi Conflict in Bawku, Ghana? What Explains the Gross Corruption in Police Departments in Uganda? The New Sociological Institutional Perspective Examining the Politics of Post-Genocide Rwanda: Legitimacy, Institutionalization and the Genocide Ideology Refugees' Impact on Host Communities and Government's Policies: Syrian Refugees in Turkey

国際日本専攻

国際日本コース	
研究領域 日本語学研究	修士論文の題目 自他両用動詞について—和語を中心に— 現代日本語のテモラウ文と使役文の異同に関する研究—テモラウ文を中心に—
日本語教育学研究	日本語学習者の音声における丁寧さと親しみと母語話者による評価—ボライトネスの観点から— 日本語教育における俳句を用いた授業の実践研究—初級から上級まで— 高校教師にとっての外国につながる生徒支援—教師へのインタビュー調査から— 日本語教育における文芸的ストーリーマン活用に向けての基礎研究—学習者による読解実験インタビューからの考察
日本語文学・文化研究	三島由紀夫における「ニヒリズム」の変遷 村上春樹文学における死のイメージの変遷—初期三部作から「海辺のカフカ」まで— 遠藤周作論—李清俊との比較を交えて— 村上春樹の作品における「存在」と「不在」についての考察—「羊をめぐる冒険」「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」を中心に— 沖縄の女性運動と国際連帯
日本社会研究	近世城郭の廃墟と保存活動—小田原城を中心として— 日本における無教会主義に関する研究 「日本の多文化家庭支援政策の強化法案の模索」—韓国における多文化家庭支援政策と配偶者に対する教育支援政策を踏まえて 日本国の空き家問題とモンゴルの住宅およびゲル地域問題

大学院は専門的な研究の場であると同時に、修了後の皆さんを社会へとつないでいく場でもあります。専門分野での学術的な研鑽を活かすためにも、次のステップを意識した準備を進めましょう。大学院博士前期課程では、修了後のキャリア形成につながる複数のプログラムを用意しています。これらは、いずれの専攻、コースに所属していても履修することができます。一定の単位を満たした場合には、キャリア・プログラムごとに「プログラム修了書」が授与されます。大学院での学びを活かし、世界や日本のさまざまな現場で働く「夢」をもつ皆さんを、後押しします。

大学院
総合国際学研究科が
目指す人材育成



多文化コーディネーター養成プログラム

多言語・多文化化する日本では、教育、行政、地域社会などの各分野で、文化や価値観の異なる人々との共存に向けてコーディネーションが行える人材が求められています。本プログラムは、日本社会の今を多面的に学び、多文化社会におけるコーディネーションに必要な知識を身につけるためのプログラムです。専門分野の研究にあたる一方で、プラスαの多文化コーディネーション力も身につけましょう。



CEFRに準拠した新しい外国語教育プログラム

現在、世界の外国語教育は、学習者の習得レベルを示す国際標準規格である「ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages : 通称 CEFR)」に基づいた教授・学習・評価が中心になりつつあります。このCEFR準拠の外国語教育の理念や方法を理解し、各言語においてCEFR利用環境を整えることは、将来外国語を専門的に教えたい、外国語を活かして仕事をしたいという院生に有益なキャリア知識・技能となり、将来プロとして働く際の必要な素養の一つとなるでしょう。



日本語教育実践プログラム

世界の各地や日本のさまざまな場所で、日本語をきちんと教えることのできる人が必要とされています。だからこそ、「日本」を専攻する院生だけでなく、世界の「言語・文化・社会」を学ぶ院生の多くに履修してほしいのが、この日本語教育実践プログラムです。外国語としての日本語とその教え方について学び、短期の実習も行います。在学中および卒業後に、国内外で日本語を教えるための基本的な知識と経験を獲得しましょう。



世界史教育プログラム

国際社会コースの院生は、中学の社会、高校の地理歴史の一種免許状を取得できます。このプログラムでは、さらに高校の地理歴史科教員の専修免許の取得を目指す院生を支援します。「世界史教育1」では、意欲の高い高校教員向けの世界史セミナーへの参加を中心に、歴史教育の深みと現状に触れます。また、「世界史教育2」では、歴史学方法の基礎と史料の読み方について実践的な教育を受けます。



国際行政入門プログラム

将来、官公庁等で行政に携わろうとする院生に向けたプログラムで、行政に必要な政治学と経済学に関する基礎知識とその考え方を習得します。また、国家公務員採用総合職試験(院卒者試験・大卒程度試験)、外務省専門職員採用試験を中心に、公務員試験の専門試験(多肢選択式、記述式)に対応できる基礎的な知識を身につけ、実践的な解法を習得します。

言語文化専攻

世界の言語・文学・文化の森に分け入る

言語文化専攻では、高度な言語運用能力を基礎として、さまざまな言語・文学・文化を理解し、先端的な研究を行います。世界の諸地域の言語や文化を個別にあるいは対照的に研究対象としますが、同時に複言語・複文化の視点を併せもつことが重視されます。また、国や地域を超え、学問分野をまたいで、領域横断的な研究に取り組んでいることも特色です。本専攻では、これまで培ってきた着実な言語文化研究の基盤に立ち、グローバル化が進行する世界の状況に柔軟に対応できる教育と研究の環境が整えられています。多彩な教員の指導の下、さまざまな研究テーマをめぐる活発な研究活動が展開されています。

博士後期課程の最終目標が学位論文の執筆と博士号の取得にあることは言うまでもありません。もちろんそれは容易な道程ではなく、たゆまぬ努力が必要です。そのため本専攻では、主任指導教員と2人の副指導教員による共同指導体制が実施されており、研究の進捗状況を段階ごとに評価し、助言を

えることによって、学位論文の執筆に向けた適切な道筋を示すシステムが構築されています。また、学内の多岐にわたる分野の教員で組織される語学研究所や総合文化研究所などの研究会や企画に参加して、自己の研究の幅を広げ、深化させることも可能であり、博士論文の完成に向けて、日ごろよりさまざまな研究機会を積極的に活用することが望めます。

授業科目は、それぞれの国や地域の言語・文学・文化に関する研究と言語基礎論、言語教育論、対照言語論、比較言語文化論、認知科学論、思想文化論、文化人類学など理論系科目を中心に構成されています。また、多分野交流研究など、専門地域・分野を超えて学生たちが互いに知的刺激を与え合い、交流することができるように工夫された科目も開設されています。社会の要請に応えるという点からは、言語教育学分野の専門コースが設けられており、日本語教育・英語教育において、研究を主眼としながら、同時に高度専門職業人の養成を図っています。



特色は、高度な言語運用能力を基礎として、複言語・複文化の視点を併せもち、領域横断的な研究に取り組んでいること。専門地域・分野を超えて学生が互いに知的刺激を与え合い、交流できるような科目も開設。

近年の博士論文の題目例

- | | |
|---|--|
| <p>大江健三郎研究
—「死と再生」という主題をめぐる—</p> <p>古代教会スラブ語の分詞について
—福音書テキストを対象に—</p> <p>大規模コーパスに基づく日本語教育語彙表の作成</p> <p>中島敦研究—異空間の探求と表象—</p> <p>ポルトガル語の接続法とその習得</p> <p>曖昧：イタロ・ズヴェーヴォの文学的戦略と結末の関係</p> <p>Transizione delle figure femminili nella letteratura italiana del Novecento: punti sulle opere in prima persona di Moravia (20世紀イタリアにみる変化する女性像—男性作家による女性—人称作品を中心に—)</p> <p>事象の「所有」に基づくlassenおよび自由与格による項の拡張
—ドイツ語の移動動詞を例に—</p> <p>日本語のモノと場の二者関係の概念化と自動詞・他動詞構文に関する研究</p> <p>17世紀末および18世紀初頭フランス語におけるリエゾンの分析
—Milleran (1694) およびVaudelin (1713,1715) の文献調査を基に—</p> <p>16世紀後半のスペイン王国における歴史編纂</p> <p>競合する語り：香港で働くインドネシア人家事労働者によるイスラム文学創作グループ「ペン・サークル・フォーラム香港」</p> | <p>大学入試における自由作文問題の学習と指導への波及効果</p> <p>友人間の「謝罪談話」における日韓対照研究
—ディスコース・ボライトネス理論の観点から—</p> <p>現代共同体論の展開と芸術の変容
—「表象」から「エクスポジション」へ—</p> <p>日本語と韓国語における所有表現の対照研究
—所有に見られる連続的様相と機能の棲み分け—</p> <p>現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトの
カテゴリーに関する一考察
—可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について—</p> <p>現代日本語の使役文に関する一研究
—文中における「V-サセル」の形・機能と意味とのかわり—</p> <p>深沢七郎論
—近代を見つめる土俗の眼差し—</p> <p>平安前期における日本漢詩文学の研究</p> <p>日本語学習者のコロケーション習得に関する研究
—動詞「する」を中心に—</p> <p>フランス語学習者の発話における使用語彙分析</p> <p>La danza nel futurismo:
Giannina Censi e la danza moderna
未来派の舞踊 —ジャンニーナ・チェンシとモダン・ダンス—</p> <p>中国語の可能補語〈-得/不了〉と〈-得/-不得〉
—可能とモダリティ—</p> |
|---|--|

在学生メッセージ

宮内拓也

博士後期課程1年

大学院では、冠詞のない言語(特にロシア語)における名詞句の統語論と意味論の研究をしています。特に、束縛現象をもとに統語構造を検討したり、投射の数と定性・特定性の意味解釈の関係を探ったりしています。また、国立国語研究所の非常勤研究員として、視線走査装置や脳波計を用いた実験言語学的研究、コーパスに対する意味情報のアノテーション基準の策定といった自然言語処理的研究な

ども行っています。

ゼミは研究発表の場となっていて、数週に一度発表の番が回ってくるので、成果を出すため日々必死に研究しています。曖昧なことを述べるとう講生や先生から突っこみが入るため、準備にも気が抜けません。

将来的には、個別言語の記述を大事にしながらも、一般言語理論にも寄与できるような研究をしたいと考えています。



Message

国際社会専攻

特色は、地球上の歴史や社会、文化を対象としながら、総合国際学という学問的視座の確立を目指していること。国際社会の問題に積極的かつ柔軟に取り組む専門研究者、豊かな教養とグローバルな視点を備えた高度専門職業人を育成。

地域固有・地域横断・諸地域間の問題を解明する

本専攻では2つのタイプの人材の育成を目指しています。1つは豊かな臨地体験をもち、現地語資料の読解・分析能力を駆使して、現代の国際社会や世界各地で生起しているさまざまな問題に積極的かつ柔軟に取り組む先端的な専門研究者です。もう1つは、世界諸地域の言語・文化・社会に関する豊かな教養とグローバルな視点を備えた高度専門職業人です。

地球上のさまざまな地域の具体的な歴史や社会、そこで創造されつつある文化を分析の対象とする一方で、総合国際学という学問的視座の確立を目指そうというのが、本専攻の特色であり目的です。そのため本専攻では、すでに本学において長期にわたって蓄積されてきた、豊かな学問的国際連携の実践と経験とを活かしながら、高度で先端的な地域研究や地域横断的研究、地域間関係などの研究に取り組むこととなります。博士論文を完成させるには、綿密な研究計画、研究資料を読みこなし語学力を基に、現地での文献調査やフィールドワーク、内外の

学会での研究発表、学術雑誌への論文投稿などを着実に積み重ねてゆく必要があります。そのための研究指導は、主任指導教員と2人の副指導教員が連携して行います。

本専攻では、2013年度から入学者選抜方法を改め、提出論文と研究計画を中心に、語学力を加味して総合的に評価することとしました。言語に関する筆記試験の負担が軽減されていますが、本専攻で研究するためには高度な語学力が求められることは言うまでもありません。地域研究においては、英語などの研究言語に加え、現地資料を分析したり、フィールドワークを行ったりするための地域言語に精通している必要があります。一方、グローバル化が進む国際社会では、ますます増大する英語で発信される情報を、英語以外の言語で発信される情報によって相対化し、多面的な視座を獲得することも重要となっています。本学には他大学に類を見ない充実した言語学習の環境がありますので、現在の語学力にさらに磨きをかけ、研究に活かしてもらいたいものです。



近年の博士論文の題目例

- 現代ウズベキスタンの社会変容と教育
- 中国内モンゴルにおける集合的記憶
—モンゴル民族の英雄ガーダー・メイレンを事例として—
- 清代初期のモンゴル法とその適用
—順治年代(1644-1661)を中心に—
- 現代中国の市場経済と「良き母親」言説の再編
—都市部で働く「80後」の高学歴女性を中心に—
- 20世紀初頭のトルキスタンにおける教育改革
—ジャディード知識人の試み—
- Modernization in Edo Japan and Qajar Iran
(Structural and Cultural Preconditions)
—一九三〇年代のモンゴル・ナショナリズムの諸相
—満州国の内モンゴル「知識人」の民族意識と思想—
- PHILOSOPHIE DES MASSES
ÉTUDE SUR LA PENSÉE POLITIQUE D'ÉTIENNE
BALIBAR
大衆の哲学—エティエンヌ・バリバルの政治思想研究
- 植民地期ベトナムの度量衡制度にみる地域的多样性和植民地統治
- 都市貧困層の社会運動への参加
—サンパウロの住宅運動をめぐる制度化とエージェンシー—
- The Impact of the Sudan's Intra-North Power Struggle
on the North-South Conflict:
Historical Analysis of Post-Independence National
Regimes'approaches to Conflict Resolution
- 民団系在日朝鮮人の韓国民主化運動
—「連帯」の中の「分断」
- 1920年代の中国の反キリスト教運動
—啓蒙と救亡、教会本色化の錯綜—
- Privatization of Security in Colombia:
Expanding the Concept of Militarization
- An Unlikely Convergence : The Evolution of Disarmament,
Demobilisation and Reintegration (DDR) Theory and
Counterinsurgency (COIN) Doctrine
- 現代トルコにおけるフェトウッラー・ギュレンの思想
および運動の志向性とその変容
- 変容するイスラームの学びの文化
—マレーシア・ムスリム社会に関する文化人類学的考察
- 19世紀フランスにおける民謡収集と地域意識の形成
—地域と国家との間で
- 現代イスラーム法思想の概念的検討
—ムスリム・マイノリティ法学がイスラーム法学に提起する問題を中
心に—
- フロンティアの終焉
—移動するカレン族の民族誌
- 植民地的開発と台湾社会の相剋
—嘉南大圳と日月潭発電所建設を中心に

在学生メッセージ

村上昂音

博士後期課程2年

博士後期課程の生活を一言で言うと、日々「カカオ70%のビターチョコ(苦くて甘い)」を味わっている感じです。莫大な資料や文献の中で、ひたすら自分の言葉の糸を紡ぎ、そして道を開拓します。そのトンネルの中を光で導いてくださるのは指導教員です。そして、さまざまな研究会や勉強会に参加し、調査の現地に足を運び、現場の事実を五感で確かめ、その位置付けに新たな意義を賦与する作業の繰り返しです。

私の専門は中国の福祉事業の民間委託で、公共サービスにおける政府と民間組織との協働に福祉事業の新たな可能性を模索しています。ご指導いただいた先生方からしみじみ感じ取った学問に対する真摯な態度、惜しまぬ努力、人間としての誠実さ、これこそ人文社会科学における実証研究です。このような研究者を目指したい一心です。



Message

博士前期課程

世界言語社会専攻

言語文化コース	
教員名	専門分野
青山 亨	東南アジア宗教史
秋廣 尚恵※	フランス語学
粟屋 利江	南アジア近代史
五十嵐 孔一	朝鮮語学
市川 雅教	統計学
岩崎 務	西洋古典文学
上田 広美	カンボジア語学
浦田 和幸	英語学
大谷 直輝※	英語学、認知言語学
岡田 和行	モンゴル近代文学
岡田 知子	カンボジア文学
岡野 賢二	ビルマ語学
風間 伸次郎	アルタイ諸言語
加藤 晴子	中国語学
加藤 雄二	アメリカ文学・文化
金指 久美子	スラブ語学
川口 裕司	フランス語学
川島 郁夫	中国近世文学
川上 茂信	スペイン語学
クネゼヴィッチ・ジュリア※	英語通訳
久野 量一	ラテンアメリカ文学
黒澤 直俊	ポルトガル語学
斎藤 弘子	英語音声学
佐々木 あや乃	ベルシア古典文学
佐野 洋	情報工学
澤田 英夫(A)	ビルマ系少数民族言語
菅原 睦	チュルク語
鈴木 聡	アングロ・アイリッシュ文学
鈴木 玲子	ラオス語学
高島 英幸	英語教育学
武田 千香	ブラジル文学
田島 充士	教育心理学
趙 義成	朝鮮語学
鶴田 知佳子	通訳・翻訳学
ティップティエンボン・コースイット※	タイ文化・文学
投野 由紀夫	コーパス言語学
内藤 稔※	コミュニティ通訳研究
中川 裕	音声学・音韻論
長屋 尚典※	言語学、オーストロネシア諸語
中山 俊秀(A)	北米先住民諸言語
成田 節	ドイツ語学
南 潤珍	朝鮮語学
西岡 あかね	ドイツ文学
丹羽 京子	ベンガル文学
温品 廉三※	モンゴル語学
沼野 恭子	ロシア文学
根岸 雅史	英語教育学
野平 宗弘※	ベトナム文学
野元 裕樹	言語学、マレー語学
博多 かおる	フランス文学
萩田 博	ウルドゥー語学・文学
橋本 雄一	中国近現代文学
林 和宏	イタリア古典文学
林 佳世子	オスマン朝史
匹田 剛	ロシア語学
藤井 守男	ベルシア文学・思想
藤縄 康弘	ドイツ語学
降幡 正志	インドネシア語学
星 泉(A)	チベット語学
前田 和泉	現代ロシア文学
益子 幸江	音声学
松浦 寿夫	フランス近代芸術
真鍋 求	ウルドゥー語
萬宮 健策	インド思想
水野 善文	言語学、手話諸言語、アサバスカ語
箕浦 信勝	現代中国語
三宅 登之	対照言語学
望月 圭子	自然言語処理
望月 源	スラヴ言語学
森田 耕司	宗教学、イスラム思想
八木 久美子	ドイツ文化・思想
山口 裕之	イタリア語学
山本 真司	イラン諸語研究
吉枝 聡子	第二言語習得
吉富 朝子	科学技術史
吉本 秀之	アラビア語学
ラトクリフ, ロバート	セイルッシュ語
渡辺 己(A)	
国際社会コース	
教員名	専門分野
青木 雅浩※	モンゴル近現代史
青山 弘之	現代東アラブ政治
飯塚 正人(A)	中東地域研究
伊東 剛史	イギリス近代史
今井 昭夫	ベトナム近現代史
今福 龍太	メディア批評
岩崎 稔	哲学、政治思想
大川 正彦	現代政治理論

小笠原 欣幸	台湾政治
岡田 昭人	比較・国際教育学
小川 英文	東南アジア考古学
小田原 琳※	イタリア史
加藤 美帆	教育社会学
金光 光太郎	アメリカ研究
蒲生 慶一	国際経済学
菊池 陽子	ラオス近現代史
金 富子	ジェンダー論
久米 順子	西洋美術史
倉田 明子※	中国近代史
栗原 博之	オセアニア研究
栗原 浩英(A)	ベトナム現代史
坂井 真紀子	アフリカ開発社会学
佐々木 孝弘	アメリカ社会史
澤田 ゆかり	現代中国研究
篠原 琢	中東近現代史
島田 志津夫※	中央アジア地域研究
陶安 あんど(A)	中国法制史
鈴木 茂	ブラジル史
鈴木 美弥子	民法
鈴木 義一	現代ロシア研究
芹生 尚子	フランス社会史(近世・近代)
左右田 直規	マレーシア政治社会史
相馬 保夫	ドイツ近現代史
田島 陽一	国際経済学
巽 由樹子※	ロシア近現代史
千葉 敏之	ヨーロッパ中世史
土佐 桂子	東南アジア人類学
中山 智香子	経済思想・社会思想
西井 涼子(A)	東南アジア人類学
丹羽 泉	朝鮮宗教学
深澤 秀夫(A)	社会人類学
福嶋 千穂※	近世ポーランド・リトアニア史
藤井 毅	インド近現代史
真島 一郎	文化人類学
松隈 潤	国際法
宮田 敏之	タイ経済研究
宮地 隆廣	ラテンアメリカ地域研究
山内 由理子	オセアニア地域研究
吉田 ゆり子	日本近世史
米谷 匡史	日本思想史
李 孝徳	比較文学
若松 邦弘	比較政治
渡邊 啓貴	ヨーロッパ国際関係論

Peace and Conflict Studies コース		
教員名	専門分野	
伊勢崎 賢治	平和構築	
篠田 英朗	平和構築	
松永 泰行	政治学、国際関係論	

国際日本専攻

教員名	専門分野
荒川 洋平	認知言語学
石澤 徹※	日本語教育学
伊集院 郁子	日本語教育学
伊東 祐郎	日本語教育学
海野 多枝	言語教育学
大津 友美	日本語教育学
金子 比呂子	日本語教育学
河路 由佳	日本語教育学
川村 大	日本語学
楠本 徹也	日本語学
工藤 嘉名子	日本語教育学
小松 由美	異文化間コミュニケーション
坂本 恵	日本語学
柴田 勝二	日本語学
清水 由貴子※	日本語学
菅長 理恵	日本語、日本文学
鈴木 智美	日本語教育学
鈴木 美加	日本語教育学
谷口 龍子	語用論、日本語教育学
土田 久美子※	多文化社会論
友常 勉	日本思想史
中井 陽子	日本語教育学
中村 彰	日英統語論
長谷部 美佳※	コミュニケーション論
花園 悟	日本語学
早津 恵美子	日本語学
春名 展生※	日本史、日本政治
平野 宏子※	日本語教育学
藤村 知子	日本語教育学
藤森 弘子	日本語教育学
ポーター, ジョン※	日本史
宮城 徹	異文化間コミュニケーション
村尾 誠一	日本古典文学
穂 隆博	数学
林 俊成	言語教育学

(A): アジア・アフリカ言語文化研究所所属教員 ※は主任指導教員になることができない教員

博士後期課程

言語文化専攻

教員名	専門分野
五十嵐 孔一	朝鮮語学
岩崎 務	西洋古典文学
上田 広美	カンボジア語学
海野 多枝	言語教育学
浦田 和幸	英語学
岡田 和行	モンゴル近代文学
岡田 知子	カンボジア文学
岡野 賢二	ビルマ語学
風間 伸次郎	アルタイ諸言語
加藤 晴子	中国語学
加藤 雄二	アメリカ文学・文化
金指 久美子	スラブ語学
川上 茂信	スペイン語学
川口 裕司	フランス語学
河路 由佳	日本語教育学
川島 郁夫	中国近世文学
川村 大	日本語学
久野 量一	ラテンアメリカ文学
呉人 徳司(A)	言語学
黒澤 直俊	ポルトガル語学
斎藤 弘子	英語音声学
佐々木 あや乃	ベルシア古典文学
佐野 洋	情報工学
澤田 英夫(A)	ビルマ系少数民族言語
椎野 若菜(A)	東アフリカ民族誌学
柴田 勝二	日本近代文学
芝野 耕司(A)	情報工学
菅原 睦	チュルク語
鈴木 聡	アングロ・アイリッシュ文学
鈴木 智美	日本語教育学
鈴木 玲子	ラオス語学
高島 英幸	英語教育学
武田 千香	ブラジル文学
田島 充士	教育心理学
谷口 龍子	語用論、日本語教育学
趙 義成	朝鮮語学
投野 由紀夫	コーパス言語学
中川 裕	音声学・音韻論
中山 俊秀(A)	北米先住民諸言語
成田 節	ドイツ語学
南 潤珍	朝鮮語学
西岡 あかね	ドイツ文学
丹羽 京子	ベンガル文学
沼野 恭子	ロシア文学
根岸 雅史	英語教育学
博多 かおる	フランス文学
橋本 雄一	中国近現代文学
林 和宏	イタリア古典文学
早津 恵美子	日本語学
匹田 剛	ロシア語学
藤井 守男	ベルシア文学・思想
藤縄 康弘	ドイツ語学
降幡 正志	インドネシア語学、スダ語学
星 泉(A)	チベット語学
萬宮 健策	ウルドゥー語
前田 和泉	現代ロシア文学
益子 幸江	音声学
松浦 寿夫	フランス近代芸術
水野 善文	インド思想
峰岸 真琴(A)	オーストラリア諸語
箕浦 信勝	言語学、手話諸言語、アサバスカ語
三宅 登之	現代中国語
村尾 誠一	日本古典文学
望月 圭子	対照言語学
望月 源	自然言語処理
森田 耕司	スラヴ言語学
八木 久美子	宗教学、イスラム思想
山口 裕之	ドイツ文化・思想
吉枝 聡子	イラン諸語研究
吉富 朝子	第二言語習得
吉本 秀之	アラビア語学
ラトクリフ, ロバート	比較文学
渡辺 己(A)	言語教育学
渡辺 己(A)	セイルッシュ語

国際社会専攻

教員名	専門分野
青山 亨	東南アジア宗教史
青山 弘之	現代東アラブ政治
粟屋 利江	南アジア近代史
飯塚 正人(A)	中東地域研究
石川 博樹(A)	アフリカ史
伊勢崎 賢治	平和構築
今井 昭夫	ベトナム近現代史
今福 龍太	メディア批評
岩崎 稔	哲学、政治思想
岡田 昭人	比較・国際教育学
小川 英文	東南アジア考古学
加藤 美帆	教育社会学
金井 光太郎	アメリカ史研究
蒲生 慶一	国際経済学
河合 香史(A)	東アフリカ牧畜民研究
菊池 陽子	ラオス近現代史
金 富子	ジェンダー論
久米 順子	西洋美術史
栗田 博之	オセアニア研究
栗原 浩英(A)	ベトナム現代史
黒木 英充(A)	東アラブ近現代史
小松 久男	中央アジア近現代史
近藤 信彰(A)	イラン史
坂井 真紀子	アフリカ開発社会学
佐々木 孝弘	アメリカ社会史
澤田 ゆかり	現代中国研究
篠田 英朗	平和構築
篠原 琢	中東近現代史
島田 周平	アフリカ地域研究
陶安 あんど(A)	中国法制史
鈴木 義一	現代ロシア研究
鈴木 茂	ブラジル史
鈴木 美弥子	民法
左右田 直規	マレーシア政治社会史
相馬 保夫	ドイツ近現代史
高松 洋一(A)	古文書学、オスマン朝史
田島 陽一	国際経済学
谷口 晋吉	ベンガル社会経済史
千葉 敏之	ヨーロッパ中世史
床呂 郁哉(A)	東南アジア人類学
土佐 桂子	東南アジア人類学
中山 智香子	経済思想・社会思想
西井 涼子(A)	東南アジア人類学
錦田 愛子(A)	記述言語学
丹羽 泉	朝鮮宗教学
林 佳世子	オスマン朝史
深澤 秀夫(A)	社会人類学
藤井 毅	インド近現代史
真島 一郎	文化人類学
松隈 潤	国際法
松永 泰行	政治学、国際関係論
宮城 徹	異文化間コミュニケーション
宮田 敏之	タイ経済研究
宮地 隆廣	ラテンアメリカ地域研究
山内 由理子	文化人類学
吉田 ゆり子	日本近世史
吉本 秀之	科学技術史
米谷 匡史	日本思想史
若松 邦弘	比較政治
渡邊 啓貴	ヨーロッパ国際関係論

(A): アジア・アフリカ言語文化研究所所属教員

主な就職先

博士前期課程修了者の 主な就職先

■ 製造業

(株)伊藤園/出光興産(株)/住友化学(株)
/ (株)ブリヂストン/住友電気工業(株)/
蛇の目マシン工業(株)/住友スリーエム(株)
/ カシオ計算機(株)/ソニー(株)/ダイキン
工業(株)/(株)東芝/日本アイ・ビー・エム
(株)/日本トムソン(株)/日本ヒューレット・
パッカード(株)/パナソニック(株)/(株)日立
製作所/富士ゼロックス(株)/富士通(株)
/ 本田技研工業(株)/マツダ(株)/三菱自
動車工業(株)/三菱重工業(株)/森永乳
業(株)/矢崎総業(株)/(株)ソニー・コンピュ
ータエンタテインメント/大王製紙(株)/
(株)リコー/ヤマハ(株)/日立アプライアンス/
日立オートモティブシステムズ(株)

■ 電気・ガス・熱供給・水道業

中国電力(株)/東京ガス(株)

■ 情報通信業

(株)インターネットイニシアティブ/(一社)
共同通信社/小松情報システムサービ
ス(株)/(株)産業経済新聞社/上海東方
テレビ(中国)/(株)集英社/(株)大和総
研/(株)中日新聞社/(株)日本経済新聞
社/(株)西日本新聞社/日本放送協会
(NHK)/(株)東日本放送/(株)毎日新聞
社/富士ソフト(株)/富士ゼロックスシ
ステムサービス(株)/明治図書出版(株)/読
売新聞グループ/(株)リクルートホールディ
ングス/勉強出版(株)/(財)ラヂオプレス

■ 運輸業、郵便業

(株)商船三井/ヤマト運輸(株)

■ 卸売・小売業

(株)カインズ/住友商事(株)/(株)セブン
イレブン・ジャパン/双日(株)/豊田通
商(株)/(株)日立ハイテクノロジーズ/三
井物産(株)/三菱商事(株)/森村商事(株)
/ (株)ルイ・ヴィトンジャパンカンパニー
/ (株)ユニクロ/(株)ニトリ

■ 金融業・保険業

アメリカン・エクスプレス・ジャパン(株)
/ JPモルガン証券(株)/ソシエテ・ジェ
ネラル証券(株)/大和証券(株)/日本銀
行/(株)日本政策投資銀行/(株)日本政
策金融公庫/(株)三菱東京UFJ銀行/
(株)ゆうちょ銀行

■ 建設業

新日鐵住金エンジニアリング(株)/大成
建設(株)

■ 不動産業

野村不動産(株)

■ 教育、学習支援業・学校教育

学校法人慶應義塾/(独)日本学生
支援機構/(株)栄光/神奈川県公立高
等学校/鎌倉学園中学校・高等学校
/ 校成学園女子中学高等学校/國
學院高等学校/埼玉県立小学校/
昭学院秀英中学校・高等学校/学
校法人帝京大学/(株)Z会/東京外国
語大学/東京大学/東京都立中学校
/(株)ベネッセコーポレーション/宮城
県公立高等学校/山形県公立高等学
校/学校法人早稲田大学/学校法人
東京農業大学/海城中学高等学校/
ベオグラード大学(セルビア)/女子
学院中学校・高等学校/学習院女子
中・高等科

■ 医療、福祉

日本赤十字社

■ サービス業

(独)国際交流基金/(独)日本学術
振興会/(財)日本国際協力システム/
(独)日本貿易振興機構アジア経済研
究所/(株)図書館流通センター/公益
財団法人新国立劇場運営財団/(独)
高齢・障害・求職者雇用支援機構/
(独)住宅金融支援機構/公益社団法人
日本・インドネシア経済協力事業協
会/ヒューマンリソシア(株)/(独)石油
天然ガス・金属鉱物資源機構/(社)日
本貿易会

■ 公務

国立国会図書館/総務省(関東管区
行政評価局)/東京都庁/農林水産
省/防衛省(※自衛隊など含む)/横
浜市役所

■ 学術研究専門・技術サービス業

アクセンチュア(株)/アンダーソン・毛
利・友常法律事務所/(独)新エネ
ルギー・産業技術総合開発機構/日本
工営(株)/(株)ワールドインテック

■ 生活関連サービス業、娯楽業

(株)オリエンタルランド/(株)JTB/(株)
CECIL/クラブツーリズム(株)

博士後期課程修了者の 主な就職先

■ 情報通信業

NHN PlayArt(株)

■ 卸売・小売業

(株)Super Dieboard System in Japan

■ 教育、学習支援業・学校教育

厦門大学(中国)/京都産業大学/高
知大学/国際交流基金バンコク日本
文化センター/鳥根大学/駿河台大学
/ 西南学院大学/燕山大学外国語学
院(中国河北省)/青島科学技術大学
(中国山東省)/帝京科学大学総合教
育センター/東京外国語大学/明星
大学/早稲田外国語学校/名古屋外
国語大学/国際教養大学/タシケント
国立東洋学大学

■ サービス業

(独)日本貿易振興機構アジア経済研
究所

■ 公務・国家公務

法務省

大学院

総合国際学研究科は
博士前期課程の改組
によって2016年度より新しい姿に生まれ変
わっています。

昨今の国際情勢を見れば、グローバル
化の波が急速に世界の様相を変化させ
ていますが、それは世界の単純な均一化
ではなく、既存の国家・地域文化・社会と
の相互作用が生じることによって、私たち
が取り組むべき問題はむしろいっそう多
面的で複雑になっています。

博士前期課程では研究者養成系と高度
職業人養成系に分けて大学院教育を
行ってきましたが、近年のこのような状況
に対応できる能力を身につけるためには、
学問分野の固定化された枠組みや、研究
者・高度職業人の二分化にとられない
柔軟な教育体制が必要であると考えまし
た。そのため、従来の4専攻を融合化して
「世界言語社会専攻」とし、多様な問題に
対して、俯瞰的な視点によって物事を捉え
る総合力と、コミュニケーションやコーディネ
ーションの具体的な実践力を併せもつ
た人材の養成をスタートさせました。もち
ろん、世界諸地域の言語の運用能力を
基礎とした言語・文化・社会の研究という
本学伝統の強みは変わりありません。

一方、日本についても世界との関係で捉
える必要がますます大きくなっていることか
ら、日本地域・日本語の教育研究に関わ
る本学の教員を結集し、「国際日本専攻」
を設置しました。この新しい専攻には国内
外の先進的研究者も招聘し、「世界の中
の日本」を客観的な視座をもって理解し、
世界に向け日本を発信することのできる人
材の養成を目指します。

このように生まれ変わった本学大学院
において、世界と日本について新たな視点
によって新たな理解を探求し、「総合国際
学」をさらに深化させようとする私たちのチ
ャレンジに、皆さんが参加してくださるこ
とを心より願っています。

大学院総合国際学研究科長 **岩崎 務**



研究科長メッセージ Message with Tsutomu Iwasaki

2017年度入学者選抜日程

博士前期課程

1. 募集人員

専攻	入学定員	コース	募集人員			
			合計	特別選抜(推薦)	秋季	冬季
世界言語社会専攻	102人	言語文化コース	50人	若干名	50人*	若干名
		国際社会コース	40人	若干名	40人*	若干名
		Peace and Conflict Studiesコース	12人	—	—	12人
国際日本専攻	46人	国際日本コース	40人	若干名	40人*	若干名
		日本語教育リカレントコース	6人	—	6人	—

*秋季募集の募集人員には、「冬季募集」「特別選抜(推薦)」の募集人員を含む。

2. 入学試験日程

特別選抜(推薦)[平成29年4月入学]

出願期間	選抜期日				入学手続
	第1次選考(書類)	第1次合格発表	第2次選考(口述)	最終合格発表	
平成28年8月3日(水) ～8月5日(金)	平成28年8月下旬	平成28年8月26日(金)	平成28年9月3日(土)	平成28年9月9日(金)	平成29年1月16日(月) ～1月17日(火)

秋季募集[平成29年4月入学]

出願期間	選抜期日			入学手続
	筆答試験	口述試験	最終合格発表	
平成28年9月21日(水) ～9月27日(火)	平成28年10月15日(土)	平成28年10月16日(日)	平成28年11月4日(金)	平成29年1月16日(月) ～1月17日(火)

冬季募集[平成29年4月入学]

■ 世界言語社会専攻

出願期間	選抜期日			入学手続
	筆答試験	口述試験	最終合格発表	
平成29年1月4日(水) ～1月6日(金)	平成29年2月4日(土)	平成29年2月4日(土) ～2月5日(日)	平成29年2月17日(金)	平成29年3月26日(日) ～3月27日(月)

■ 国際日本専攻

出願期間	選抜期日				入学手続
	第1次選考(書類)	第1次合格発表	第2次選考(口述試験)	最終合格発表	
平成29年1月4日(水) ～1月6日(金)	平成29年1月中旬	平成29年1月20日(金)	平成29年2月4日(土) ～2月5日(日)	平成29年2月17日(金)	平成29年3月26日(日) ～3月27日(月)

世界言語社会専攻 Peace and Conflict Studiesコース[平成29年10月入学]

出願期間	選抜期日		入学手続
	口述試験	最終合格発表	
平成29年1月4日(水) ～5月12日(金)	個別に設定	平成29年6月下旬	平成29年6月下旬 ～7月上旬

国際日本専攻 日本語教育リカレントコース[平成29年10月入学]

出願期間	選抜期日		入学手続
	口述試験(Skype面接)	最終合格発表	
平成28年9月21日(水) ～9月27日(火)	平成28年10月18日(火) ～23日(日)のいずれか1日	平成28年11月4日(金)	平成29年6月下旬 ～7月上旬

※本コースは、日本国外に在住する現職の日本語教員を対象として募集する。

博士後期課程

1. 募集人員

専攻	募集人員
言語文化専攻	20人
国際社会専攻	20人*

*国際社会専攻の募集人員には、「平和構築・紛争予防分野」の募集人員を含む。

2. 入学試験日程

博士後期課程[平成29年4月入学]

出願期間	論文提出期間	選抜期日			最終合格発表	入学手続
		筆答試験	口述試験			
			言語文化専攻	国際社会専攻		
平成28年11月21日(月) ～11月25日(金)	平成29年1月4日(水) ～1月6日(金)	平成29年1月28日(土)	平成29年1月29日(日)	平成29年1月28日(土)	平成29年2月17日(金)	平成29年3月26日(日) ～3月27日(月)

国際社会専攻 平和構築・紛争予防(Peace and Conflict Studies)分野[平成29年10月入学]

出願期間	論文提出期間	選抜期日		入学手続
		口述試験	最終合格発表	
平成29年3月1日(水) ～5月12日(金)	平成29年5月31日(水) ～6月2日(金)	個別に設定	平成29年6月下旬	平成29年6月下旬 ～7月上旬

入学者選抜日程の最新情報は、大学院総合国際学研究所のウェブサイトに掲載します。